

第23回日本インターネットガバナンス会議(IGCJ)レポート

2018年3月13日

1 会合の概要

日時： 2018年2月13日(火) 18:00～20:20

会場： JPNIC 会議室

URL： <http://igcj.jp/meetings/2018/0213/>

1.1 参加状況

会場参加者数：19名 遠隔参加者数：5名

1.2 アジェンダ

1. 2017年12月18～21日にスイス・ジュネーブで開催されたIGF 2017の振り返り

- ・全体概要

 - 一般社団法人日本ネットワークインフォメーションセンター(JPNIC)

前村 昌紀

- ・各参加者の視点

 - 政府

 - 総務省 総合通信基盤局 電気通信事業部 データ通信課

角田 梨翔

 - 技術コミュニティ

 - 株式会社日本レジストリサービス(JPRS)

堀田 博文

 - アカデミア・市民社会

 - 一般社団法人インターネットユーザー協会(MIAU)

香月 啓佑

 - 一般社団法人インターネットユーザー協会(MIAU)

八田 真行

 - ビジネス

 - ヤフー株式会社

望月 健太

 - 一般財団法人インターネット協会(IAJapan)

木下 剛

 - セキュリティ

 - 内閣官房 内閣サイバーセキュリティセンター(NISC)

(JPNIC 前村氏が代理発表)

- ・NRI と Japan IGF

 - National Regional IGF(NRI)を取り巻く環境、IGF 2017におけるNRI関連セッション

 - 一般社団法人日本ネットワークインフォメーションセンター

前村 昌紀

 - IGF-Japan の紹介・次回会合案内

2. 2017 年の IGCJ について振り返り

IGCJ を考える会

堀田 博文

3. 「IGCJ を考える会」振り返り

IGCJ を考える会

大橋 由美

4. 議論

5. AOB

2 口頭での報告内容・質疑応答・議論内容

2.1 2017 年 12 月 18～21 日にスイス・ジュネーブで開催された IGF 2017 の振り返り

2.1.1 全体概要

JPNIC 前村氏より資料「全体概要」に基づき説明が行われた。

2.1.2 政府

総務省 角田氏より資料「第 12 回 IGF 結果概要」に基づき政府の視点から見た IGF 2017 の説明が行われた。

2.1.3 技術コミュニティ

JPRS 堀田氏より、下記のとおり技術コミュニティの視点から見た IGF2017 の説明が口頭で行われた。

・堀田氏

- IGF が設立した大きなきっかけはインターネットの資源管理をより公平にするためであり、民間主導ではなく ITU や国連の下で管理すべきと主張する勢力と議論するために IGF が始まった。自分も非常に興味があり、IGF に登壇して民間主導による管理の重要性を主張してきた。
- 近年の IGF ではそのような議論は殆ど無くなり、例えばガバナンスへの公平な参加や人権などの上位レイヤーの議論が増えてきた。そのため、インフラエンジニアの参加は減り、一方で今回の IGF では市民社会からの参加者が目立った。
- AI、ビッグデータ、IoT、ブロックチェーン、ネット中立性などがキーワードとして掲げられているワークショップが多かった。
- 資源管理を担当しているインフラエンジニアとしては、インフラに影響する可能性があるので IGF での議論を迫る必要はある。しかし、現状では積極的にワークショップを開催するまでの動機はなく、今回の IGF では、インフラは議論の的ではなくなってきた印象を持った。

2.1.4 アカデミア・市民社会

MIAU 八田氏より資料「IGF2017 ふりかえり」に基づきアカデミア・市民社会の視点から

見た IGF 2017 の説明が行われた。その後、同じく MIAU 香月氏より下記のとおり説明が口頭で行われた。

・香月氏

- IGF への参加は今回で 2 回目。前回は TPP など知財関連のセッションに参加したが、今回はセッション数が減っていた。一方で AI、ブロックチェーン、フェイクニュースなどがメインテーマのセッションとして多かった印象。
- ブロックチェーンに関するセッションは幾つかあったが、すべて狭い部屋で開催され、会場に入ることができなかった。セッションでは欧州の海賊党からの参加者が多かった。海賊党のムーブメントは欧州で比較的大きく、ブロックチェーンに関心を持って参加しにきたと考えられる。
- フェイクニュース関連のセッションは毎日開催されていた。視点や立場によって見え方が違うので複数の企画が持ち込まれるのはやむを得ないが、それにしてもセッション数が多かった印象。アフリカ諸国のフェイクニュースに関する話が聞けたのは IGF ならではであり、有意義であった。
- IGF には展示ブースもあり、アフリカのユーザー団体と話すことができた。ルールメイキングに関して質問すると、具体的でかつ先進的な回答が返ってきて、通信に関するルールメイキングの考えがインターネットからスタートしている印象を受けた。日本や欧米は電話の時代からの伝統に則った議論や手法をベースにインターネットのルールメイキングをしているが、一方でアフリカ諸国はその時代の考えがないために先進的な議論ができていると感じた。

2.1.5 ビジネス

ヤフー株式会社 望月氏と IAjapan 木下氏より、下記のとおりビジネスの視点から見た IGF 2017 の説明が口頭で行われた。

・望月氏

- ヤフー株式会社で主催したセッションと、MAG¹メンバーとしての立場からの報告。
- MAG メンバーとして、デジタルエコノミーに関するメインセッションを主催した。3 時間という長いセッションでのリード役を務めた。ハイレベルな話者が登壇し、前半は電子商取引の可能性、後半は ICT 時代の雇用に関する二つのセッションを開催した。
- ヤフー株式会社からは望月氏も含め 2 名で参加。望月氏は ICC (International Chamber of Commerce : 国際商業会議所) が主催した雇用に関するセッションにも参加し、もう 1 名は AI に関するセッションに登壇した。また、Xinova 社の加藤氏が

¹ Multistakeholder Advisory Group : 政府機関、民間セクター、市民社会からのメンバーで構成され、IGF のプログラムとスケジュールについて事務局長に助言を行う。

シェアリングエコノミーのセッションに登壇した。

- メインセッションは、2017年の6月からリード役を務め、最終的な登壇者は20名を超える大規模なものとなった。オープニングステートメントでは、第11回WTO(World Trade Organization:世界貿易機関)のMC11(The Eleventh Ministerial Conference : 閣僚会議)にて、日本が電子商取引を含むICT分野において330億円の支援を行い、また電子商取引についてWTOでの議論を推進していくと表明したことを紹介し、日本のプレゼンスを示した。
- ビジネスの視点で特筆すべきは、中国の影響力が強くなってきている点。中国からの参加者数やセッション数も多くなってきている。また中国国内で世界インターネット大会も開催したように、近年中国はルールメイキングに力を入れており、今後中国とどう付き合っていかなければいけないのか真剣に考えていく必要がある。
- 次回開催地はまだ決定していないが、今後ワークショップの選定プロセスも開始されるので、今回の意見を踏まえつつ中国に偏りすぎないようにケアしながらMAGメンバーとして活動しなければいけない。

・木下氏

- 今回のIGFは12回目の参加。ここ5、6年参加している中で、今回は2年前にIGFの延長が決まったため少し気が抜けたと感じた。今まではIGFの存続にむけた理由付けを議論するワークショップが目立っていたが、今回は国連のSDGs(Sustainable Development Goals)ではなく、デジタルエコノミーが前面に掲げられていた。
- 開催地が近年までの途上国から、国連事務局のあるスイス ジュネーブに変わり、デジタルポリシーやデジタルエコノミーに積極的に取り組んでいる欧州の影響もあったと考えられる。
- ビジネスのステークホルダーからすると、全体的にビジネスに身近なテーマが散見された。例えば、電子商取引などのデジタルエコノミーでは貿易で扱われるグッズ自体がデジタル化され、そのような時代に知財や税金をどうするか議論された。今までのIGFでは聞けなかったエコノミーの話題が多く取り上げられたのが、例年のIGFとは違うポイントであった。
- インターネットガバナンスやIGFをどのように人々に説明したらよいか議論するセッションに参加した。参加者は40-50人程度だった。専門家だけではなく一般の人たちに、如何にしてインターネットガバナンスの大切さを伝えるか、分かりやすい定義や案内を作ろうと真剣に議論している姿が印象的だった。
- BPF(Best Practice Forum)は四つ開催された。IPv6は一旦区切りがついたが、新しくローカルコンテンツのセッションが企画され、インターネットの普及をさらに推進するためにはローカルコンテンツを開発、形成していく必要があると主張されており、興味深かった。

2.1.6 セキュリティ

サイバーセキュリティ関連セッションの概要をまとめた資料が共有され、NISC から参加された方の代理として JPNIC 前村氏から簡単な説明が行われた。(資料は当日参加者限り)

2.1.7 NRI 関連セッション

JPNIC 前村氏より資料「NRI (National Regional IGF Initiatives) 関連セッション」に基づき説明が行われた。

2.1.8 質疑応答

■プラットフォームの規制について

質問 (Q.) :

八田氏の発表で、今後ユーザーがプラットフォームをどのように規制するか、また、プラットフォームによってユーザーの考え方がコントロールされるなど、プラットフォームがユーザーをどう規制するかという議論が興味深かった。そのテーマに関して市民がどのように関わるができるか議論されていたら教えてほしい。また、IGF では最新の話題を扱っているが、その分議論が十分でないという具体例があれば紹介していただきたい。

回答 (A.) :

規制について市民がどう参加するか議論があったかは分からないが、プラットフォーム規制に関するセッションの報告書” Platform regulations: how platforms are regulated and how they regulate us”が既に Web に掲載されている²。まだ報告書を読んでいないが、印象では基本的に法律で規制しようとしていた。法律では市民が選んだ立法が関係するはずだが、もしかしたらより直接的な市民参加を考えているかもしれない。児童ポルノやイスラム国の動画をチェックし削除する作業者が PTSD を患ってしまったという、人力作業による規制の限界に関する事例も発表されていた。

フェイクニュースについては、提供者側への問題提起が多かった。提供者側のリテラシーが向上し、責任を持って正しいコンテンツを提供すれば解決するという主張が多かったが、個人的には受け取る側にも問題があると考えている。受け取る側は自分の知りたいニュースを求めるので、メディアを規制して正しい情報が行き渡るようになればフェイクニュースがなくなるという議論は甘いと考える。

また、最近の研究ではプラットフォームの影響力は小さいという研究結果も多い。根拠がないのにプラットフォームの影響が強いという前提で議論が進んでおり、IGF での

² <http://bibliotecadigital.fgv.br/dspace/handle/10438/19402>

議論に甘さを感じた。

Q. プラットフォームに関連するセッションの参加人数は？

A. 関連する三つのセッションに参加したが、一番人数が多かったプラットフォーム規制に関するセッションだった。主催者が用意した報告書が無くなるくらい盛況だった、ということしかわからず、正確な数はわからない。IGF で議論されたプラットフォームの規制は、ネットワーク中立性や児童ポルノ規制など、日本における議論よりもう少し幅広くさまざまなテーマが収斂しているので、多くの人が集まっていたと考える。

2.1.9 IGF Japan の紹介

IGCJ を考える会 堀田氏より資料「IGF-Japan 2018 開催概要」に基づき、JAIPA がホストし2018年3月22日(木)に開催されるIGF-Japan 2018の開催概要について紹介された。

2.2 2017年のIGCJと、IGCJを考える会についての振り返り

IGCJ を考える会 堀田氏より、資料「2017年のIGCJを振り返って」に基づき説明が行われた。その後、IGCJ を考える会 大橋氏より、資料「IGCJ を考える会の振り返り」に基づき説明が行われ、参加者との議論となった。以下が議論された内容である。

■中国のインターネットガバナンス動向について

Q. 先ほどの発表でもあったが、中国の動向が気になっている。中国にもIGCJやIGF Japanに類する組織があるのか、また、中国でインターネットガバナンスを議論する際に誰が出てくるのか。

IGCJ 会合での議論が静かに終了するのは、参加者が同じ背景を持ち、同じ方向を向いているからで、中国などの日本と異なる背景や考え方を聞くということにも価値があるのではないか。中国にそういう議論をしている人たちがいれば話を聞いてみたいが、そういう人はいるのか？

A. IGF-China という団体があり、Web サイトもある。

A. NRI のコラボラティブセッションではIGF China、と名乗る団体がさまざまなセッションに参加し、勢力的に活動していた。IGF China の詳細は不明だが、CNNIC か Internet Society of China の関係者と考えられる（なお、Internet Society of China は Internet Society (ISOC)とは関係のない団体）。

A. IGF China は、CNNIC や政府とは無関係のようだ。詳細は CNNIC、政府、ICANN の中国常駐スタッフのいずれも把握していないそうである。

A. 中国政府が IGCJ を考える会に対して、「どうやったら政府が入った NRI を作れるか」を聞いてきたことがある。また、中国インターネット安全法が施行される際に、中国大使館に IGCJ への登壇を依頼したことがあるが断られた。日本と中国のように背景や考え方が異なる国の人が 1 対 1 で議論する場を作るのは難しいと感じた。中国のインターネットガバナンスに詳しい人を知っている方がいれば、是非紹介してほしい。

Q. 先ほどの望月氏の発表の中にあつた IGF で発言し目立っていた中国の参加者は、中国政府の関係者なのか。中国におけるインターネットガバナンスに詳しい方が、IGCJ 会合に登壇したら盛り上がると思う。

A. 中国からの参加者は政府関係者が多い。オープンフォーラムの中国セッションでは、中国のインターネット政策を立て板に水のように説明していた。IGF China の Web サイトによると、次回の IGF China はマカオで開催されるようだ。

A. 中国の動向は継続して観測しなければいけないし、関係ある人には共有しなければならない。IGCJ のような場で共有できればよい。

■IGCJ の活動・運営について

意見(C.) :

この会合での雰囲気と ML 上での雰囲気が全く違う。会合の参加者は背景と方向性がある程度一緒なので、先ほどの IGCJ の活動や運営について、分かってもらえる説明だと思うが、多くの方は、今日の発表内容について理解が無いのではないのか。考える会はボランティアであり、IGCJ は場であるため、皆がそれぞれ持ち寄って活動するのが IGCJ の建て付けだが、多くの人にとっては「IGCJ という団体があつて、IGCJ の会長は誰で、運営委員は誰で、その人たちがこれを決める」というような性質のもの思っている。

また、ML がそもそも必要なのかも個人的には疑問である。ML での多くの参加者は IGCJ の会合の場には一切参加せず、ML 上で批判をしているだけ。反対意見もあると思うが、ML を止めるのも IGCJ の別の方向性という点で一策ではないのか。

C. この後、ML についての発表があるので、是非そこでも議論したい。

■学生のインターネットガバナンス参加と、大学での IGCJ 開催について

Q. IGCJ から大学の授業やゼミに講師を派遣して、インターネットガバナンスで何が議論され盛り上がっているか学生に話してもらうことは可能か。プロばかりが参加するのではなく、大学生や院生の参加を増やすことが今後の活動に不可欠ではないか。

A. もちろん可能。学生も含めて、これからのインターネットのことを考えていければと思う。IGCJ としてだけでなく、インターネットガバナンスが重要だと考え、この場に参加している一人ひとりがそういった活動に参画できればと思う。

Q. 授業で話しても学生は聞いているだけの一方通行なので面白くないのでは。例えば、教室を借りてこの会議を開催するのはどうか？

A. 自分の勤務する大学のキャンパスに来られるのであれば歓迎。

■IGCJ の組織体制と ML の方向性について

C. IGCJ は専門家が集まってやり取りする場か、それとももう少し世間に目を向けてみるのか、どちらの方向性をとるかで今後の運営や活動内容が変わってくるのではないか。

多くの人は、会社や法人といったグループの運営にはそれなりのルールがあってそれに則って運営されることに慣れている。しかし、IGCJ にはその Web サイトを見ても、会長や決め方のルールも明示されていない。枠組みを決めないグループというものもあっていいとは思いますが、今後 ML アーカイブの公開を議論するにしろ、何かを決める際に拠り所となるルールがないのは、逆に多くの人のリソースを必要以上に使うのではないか。一度 IGCJ というものを仕切り直してもいいのではないか。

また、ML は過去を議論しても答えは出ないのではないか。非常に有能な IGCJ 参加者が、そこで時間をロスしてしまうのが心配である。ML は今後こうすると議論して決めて、そこに賛同する人だけが残るようにすればいいのではないか。

■IGCJ メーリングリストのアーカイブについて

IGCJ 事務局 前村より、資料「IGCJ メーリングリスト(ML)アーカイブについて」に基づき説明を行った後、次の通り、参加者同士の議論が行われた。

C. ML は、例えば IGCJ 会合の開催案内だけに使ってもいいのではないか。ML のフォーラムでのさまざまな意見交換は理想であるが、実際はその機能を果たしていない。

- C. ML に登録している皆のコンセンサスは果たして何なのか。先ほど説明された IGCJ という場の趣旨を汲んでいる人だけで構成された ML ではなく、1 回だけ参加して登録した人達にとっては良く分からないのでは。IGCJ というのは「場」であって、団体とか組織ではないと理解できない人には、今日発表した内容は理解してもらえないと思う。
- C. 全員の完全なる同意を取るのは難しいと思うが、ML 参加者に聞いて最大公約数を見つける作業をしなければならない。
- Q. 今のメールにアーカイブが存在していないのであれば、一旦今の ML を閉じて、新しいアーカイブ付きの ML を始める選択肢の検討は可能か。これ以上、新規参加者のハードルを上げることは避けていただきたい。
- A. 一つのオプションとしては可能。
- C. 全員の同意を得るのは難しいので、ある程度のコンセンサスができた段階で決めるしかないのではないか。他方で記録に残したい発言もあるかと思う。
- C. 非常に有用な情報を拾って ML に投げている人もいる。しかしオプションによっては、それが出来なくなる仕組みになるかもしれない。先ほどの意見に、「ML を告知用にだけ使うのはどうか」という意見もあったが、その選択肢は違う気がする。
- C. 過去を見ることができる内部用の ML と、世間に公開するこれからの ML の両方があればいいのではないか。また、IGCJ の定義や IGCJ と ML の関係は明文化しないと、会合と ML が全く別物になる可能性がある。別物ならそれでもよいが、再定義する必要がある。
- C. 世間にアーカイブを公開するか、内部のみ閲覧できるようにするかは、選択肢として検討の余地があると思う。JANOG の ML はメンバーのみアーカイブが公開されているが、メンバーは誰でもなることができる。IGCJ の ML もそのようにしても効果はあるかもしれない。ML と会合の雰囲気が乖離しているという意見について、理想としては ML でも闊達な議論をしてオンサイトでも丁々発止とやり合いたい。ML がどういう場であると定義するのは賛成。
- C. IGCJ や ML に誰が参加しているか知りたい。誰が見ているか分からないところには投げづらいので、その選択肢についても検討してもらいたい。

C. IGCJ の ML には数百人の加入者がいるので、自分の所属を公開するのは心理的障壁が高いのではないかと。また、他の ML を IGCJ の ML に登録もできるので、完全に把握するのは難しいという側面もある。

最後に IGCJ を考える会 堀田氏より、この場の意見も踏まえこれから ML のアーカイブ公開を検討する小グループ募集を募集するので、興味のある人は是非参加してほしい旨が述べられた。

■IGCJ 会合の開催頻度について

IGCJ を考える会 堀田氏より、今後の IGCJ 会合の開催頻度について以下のとおり提案があり、特に出席者からの異論はなかった。

- 現在の 2 ヶ月に 1 回の開催頻度を落としてでも、会合の中身を充実したものにしたいため、3 ヶ月、4 ヶ月に 1 回という頻度での開催を今後試したい。
- その頻度でテーマがカバーできないようであれば再度検討するが、今後このペースでの開催としたい。
- 考える会のメンバーはいつでも募集しているので、興味がある人は事務局や考える会までお知らせいただきたい。

2.3 AOB

特になし